

〈研究ノート〉

# 政 治 と 嘘

— R. ポランの政治哲学 二九 —

白 石 正 樹

## 目 次

- 一 政治における嘘・虚構
- 二 政治における嘘の現象学
- 三 政治における嘘と道徳

## はじめに

レーモン・ポランによれば、政治における嘘の使用は普通たくさんの偏見を引き起すが、その理由は、ひとがそれをあらゆる種類の見当はずれの問題で包み込むからである。嘘の使用をその正しい意義で評価するためには、それから偽りの外見を取り除くことで始めなければならない<sup>1)</sup>。

まず第一に、真理も誤謬もそれ自体としては価値でないことを思い起すほうがよい、とポランはいう。真理と誤謬は認識の領域に属している。それらは諸々の思考の間の、または現実と思考との間の、適合性または不適合性の作用や確認を指し示す。そうした資格で、それらは全然、諸々の価値でさえない。というのも、あらゆる価値は一つの評価、一つの間隔、一つの超出、一つのヒエラルキーを表すから。評価するとは超出すること、超越すること、変化することであり、またそれは所与を元にして自らの自由を行使すること、一つの行動を計画しすでに始めること、また様々な態度で実践へ移行することである。そうした資格で、諸真理は全然、諸価値でさえない。前者は確定の秩序に属するのに対して、諸価値は行動の領域にあって、自由の秩序に属するからである。

その代わりに、真実を言うこと、虚偽を言うことは、それを他者に言うのであり、彼に働きかけようと試みることである。話すことはすでに行動すること

である。言葉 (parole) は行動の一つの様相であり、おそらく行動する最も人間的な仕方である。この意味において、嘘 (mensonge) と同様に真実を語ること (véracité) — それらは表現とコミュニケーションの諸方法であるが — は、諸価値を実践する手段である。すなわち、それらは話をする人の価値と、そのひとが話しかける人の価値を掛け合いにする。それらは現動における諸価値であるし、また諸価値はそうしたものとして評価されうる。しかし、真実を語ることと嘘とは道具的諸価値であって、それらは手段の諸価値である。

最後に、政治的嘘の問題と人対人の嘘の問題を同一視してはならない、とポランは言う。この最後のものは実際、一つの道徳的問題である。各人对各人の関係における嘘と真実を語ることの評価は、それを使用する人に対して、また同じく彼が話しかける人に対して、その用法により黙示的にまたは明示的に認められる価値によって決まる。そのうえ、その評価は、人間の自由、人間の理性的仕方で熟考する能力、および人間の尊厳において考えられた、人間一般に帰される価値と結びついている。

政治における真実を語ることと嘘との用法は、たとえそれが同じくらい道徳的諸問題を提起するとしても、特定の諸問題を提起するのである。だから、ポランは、それら両方の諸問題を明らかにしようと試みるだろう。<sup>2)</sup>

## 一 政治における嘘・虚構

政治における嘘の使用は政治社会の基本的性格と結びついている、とポランは考える。あらゆる社会は、しかもとくにひとがそれをその政治的形式で考察するときには、一つの闘技的 (agonistique) 社会、すなわち諸個人が共存や協力の関係と同様、闘争の関係で結びついた社会である。結社は人々の間において、実際、次のような二つの還元しえない状態で組織される。— 一方において、協力、すなわち全員の間によく考え抜かれ同意された方法で分配された仕事、他方において、闘争、それは不可避免的な対立を解決するものである。自由の可能な、そしてそれ故にたえず再生する抑え切れない差異、相違、不平等の可能な、諸存在からなる一つの政治社会は、かれらの類似するが両立しない諸満足の、飽くことを知らない探求によってかれらを対立させる闘争を、一つの共同

の力によって保証された法律のコントロールの下での、多少とも平和的な競争の体系へと整序する<sup>3)</sup>。

あらゆる政治社会は、ポランによれば、個々人の善に打ち勝つ共通善の優位を、また個々人の力に打ち勝ちかれらを支配する公権力 (*puissance publique*) の優位を承認する。— たとえ公益の追求は、諸個人の利益を保証する最良の手段にすぎないことが認められているとしても。それでもなお、公権力と私的人格の間に緊張は存続する。コンセンサスがたいそう大きくとも、一致がたいそう理に叶っているように、それでもやはり幾つかの私的利益は必然的に侵害されるし、幾人かの個人の利益は直ちに全員の利益と同一視しえないし、また幾人かの個人が権利上または事実上、最も一般的な一致に同意するのを拒むことに変わりはない。政治家 (*le politique*) はだから、そうした反対を考慮に入れつつ自らの行動を計算せねばならず、そして、あたかも公益に対しては、すべての市民が、反対、不服従、抵抗の可能性があるかのように、なさねばならない。共通善に対して、すべての人々は、マキアヴェリの公式を再び用いるとすれば、「劣悪で邪悪」である可能性がある<sup>4)</sup>。これがあらゆる政治家の仕事の仮定であらねばならない。

公益は国家における至高の善であって、そのみが政治行動の有効性を判断する。政治行動の価値はその成功で測られる。失敗するあらゆる政治は劣悪な政治である。おそらく、その逆は真でなく、ひとは成功するあらゆる政治は善い政治であると言うことはできない。なぜなら、一つの政治の諸手段の構成や性質は、その成功の評価と切り離せないから。しかし、成功する政治は、結局は善い政治であるということを本当に認めなければならない。ほとんどつねに最も穏和な国家、法律や自由を最も尊重する国家も、その起源を暴力、対外戦争または内乱に見出したという事実の前で、ひとは目を閉じることができるか。政治において、何もかも成功ほどうまく行くものはない。

政治的人間は、だから、彼がそうしうるだけ共通善の達成をすべての人の協力の上に基礎づけようと努めるであろうし、また、その成功をできるだけ理性的説得によって得られた大多数の一致によって保証するであろう。さもないと、そして反体制派、邪悪な人々の抵抗に打ち勝つために、公権力は正統的に公的力（警察力）つまり彼がその正当な使用権を受取った暴力を行使することにな

る。それは、ひとが言うように、正義の剣にして戦争の剣 — 政治の古典的規定であるもの — をなすのである。こうして「邪悪な人々」は強制され、法律の尊重と服従へ追込まれる<sup>5)</sup>。

ところで、ポランに従えば、二種類の暴力がある。それらは力の対決を開始し公権力を危険に陥れる物理的暴力 (*la violence physique*) と、理性的正当化や感情的誘惑のような穏やかな方法を破る精神的暴力 (*la violence spirituelle*) である。精神的暴力は、嘘 (*mensonge*) の想像しうるあらゆる形態をとる。この二種類の暴力の両方とも、内在的価値をもたない。

空しく空虚なユートピアによるのでない限り、あまねく次のことが認められている。— 主権者は暴力の力を必要な仕方でもた正統的仕方で意のままに用いること、彼は暴力をなす権利をもつこと。ひとはそのとき何故に、物質的暴力を容認するであろうか、精神的暴力を排除するであろうか。つまり市民たちの生命を脅かし、それを意のままに処分しさえする権利を容認するであろうか、かれらの判断、かれらの意見を、混乱させ狂わせる権利を容認しないであろうか。物理的暴力は、それが重くのしかかる人々にとってのみならず、また主権者ないし国家にとっても、はるかに大きなリスクと取返しのつかない解決法を生ぜしめる。なぜなら、それは同時に市民を、あらゆる忠誠と法律に服従するあらゆる義務から解放するから。他方、嘘がそうである精神的暴力は、説得し賛同させるための、同意と支持を得るための、間接的方法であるにすぎない。嘘は、精神の抑えがたい自由を、また自由の堅固な最後の隠れ家たる判断力の抑えられない完全さを、侵害することはできない。各人が嘘を見つけ、欺瞞を失敗させ、また悪知恵や表裏のある行動を見分けるべきである<sup>6)</sup>。

外部の法廷では、主権者の権力は法律の範囲内で絶対的である。内心の法廷では、主権者の権力は市民たちの各々の知性と判断の自由に、対等な武器をもって直面する<sup>7)</sup>。主権者の優越性の幅はわずかである。それは彼の情報の豊かさや、それを集めるために彼に与えられる便宜に由来する。残りのすべてに対しては、最も抜け目のない人や最も達者な人が勝つ。政治家の嘘は、それを聞く人々の愚かさや臆病を唯一の味方とする。嘘の働きは、治者と被治者が従事しうる、また実際たえず従事する、相互的働きである。ポランはあえて次のように言うまでになる。— すなわち嘘の使用は、ひとが権力のどちら側に置かれていよう

とも、各人によって、彼自身の政治的自由の実践や防御と結びついている。それは知恵くらべをする者に対してのことである。そうであれば、政治において嘘をつくことは何故に恥ずべきことなのだろうか。各人の自由の力を行使すること、そして彼の洞察力、彼の知性、彼の弁論術、彼の巧妙さがそれを防衛するために、各人の力に委ねたあらゆる手段によって、それ（彼の自由の力）を防御すること、は恥ずべきことなのだろうか。<sup>8)</sup>

たんに嘘は政治家にとって有用であり必要ですらあるのみならず、それは彼にとって本質的である。公的なものと私的なものの基本的関係は、解けない内在的二重性のうえに打ち立てられている。それは絶えざる相互的な嘘の場である。政治的共同体は、私的なものの秩序と公的なものの秩序の間の一つの妥協からなる。ところで、私と公は、極限的に両立しえず、また還元しえない。それらは死を避けるために不可避的な妥協によってしか共存しないが、かかる妥協はパートナーたちの自己欺瞞を伴わないわけにはいかない。

ポランによれば、各々の私人が公的理性に従うのは、彼がそれからうまく固有の利益を引出すことを期待するからに他ならない。——彼がしかしながら決定的に同意した至高の犠牲を免れつつ、また彼が原則的に義務づけられる部分的な犠牲をつねにごまかしつつ。そのうえ彼は、極限的状况では、自分の生命の保護の名においてであれ、自分の「良心」の名においてであれ、最終的に自分の不服従、抵抗、の権利の判定者であるという不可譲の権利を自分自身に保ち続けている。各人は自分の聖なる諸価値の判定者のままであって、彼がそれらに捧げるどんな苦勞もいとわないのでさえあれば、それらの表現は、抑えきれず、また縮小できない。<sup>9)</sup>

逆に、己の正統性と己の非常に大きな権力に支えられた主権的な公的人格は、そこに具現される私的諸意志の総体と公的意志とを同一視し、己自身の公益の考え方を課し、そして諸々の同意を超出する強制を行使する傾向がある。緊急必要の法（緊急権）が介入するや、「国家理性」は諸々の見せかけやそれらを用意させる嘘を踏みつける。だからといって、主権的権力が専制主義へ向う自然的傾向を、また、つねにより大きな権力の追求へすら向う自然的傾向を告発することを望まないとしても、一方において、国家の前での私人たちの弱さを、他方において、共通規則の尊重のなかに足止めされた少数派の存在を十分に認

めなければならぬ。多数決の規則は、まったく公平に見て容認しがたい一つの切り抜け策であって、それは実際、力による正当化を、権利による正当化に置き換えている。この明らかなソフィズム（詭弁）は、ひとが多数決の規則の諸徳を賞賛するとき、一つの嘘に変わる<sup>10)</sup>。

公的「理性」は、私的諸理性に打ち勝つ傾向がある。自らの力に引きずられて、公的「理性」は、理にかなった「理性」に打ち勝つ危険を冒す。その証拠はまったく単純である。— 政治的共同体がその上に基礎づけられる諸妥協の体系は、たえず揺れ動く。それはいつも諸々の誘惑、諸々の違反、諸々の抑圧に、要するに、真の地震である力の対決 (épreuves de force) に従わされている。それは、もしそれが公的力（警察力）に支えられないならば、カルタの城のように崩れるだろう。政治における物理的力は、つねに精神的力、つまり嘘、を助けにやってくる。それは後者の至高の保証、後者の裁可、語の最も強い意味での後者の「正当化」である。それは嘘を正しくかつ真なるものにする。このことがおそらく全く単純に言おうとするのは、それは新しいコンセンサスの確立に貢献する、ということである<sup>11)</sup>。

ルソーのような人にとって名高い社会「契約」は、それ自体、一つの嘘のシンボルまたは嘘つきの神話でしかない。たんに『不平等起源論』の終りに記された不当な契約 (le contrat léonin)<sup>12)</sup> — それによって富者は、すべての人に安全を保障するという口実のもとに、貧者に対して、かれらを実際は奴隷状態または隷属に陥れる一つの契約を課した — のみならず、『社会契約論』の公平な契約 (le contrat équitable) もそうである。なぜなら、各個人が有効に自分自身と契約することができるというのは真実でないから（ルソーは、数ページ先の自分のテキスト自体のなかで、そのことを認めている最初の人である）。各市民は、国家のメンバーの資格で、主権者のメンバーの資格での自分自身にしか決して服従しない、というのは真実ではない。各人は、全共同体に対する自分自身の全面的譲渡に長期間にわたり同意する、というのは真実ではない<sup>13)</sup>。社会契約はたんなる見せかけの連続、客観的かつ主観的嘘の連続でしか決していないが、このことは、もっとも、それがそれなくして政治的共同体が長く存続しえないところの、シンボル、必然的シンボル、事実上の社会的コンセンサス、というその決定的役割を演じることを何ら妨げない。すべてのことを一つのイ

メージで言うとするれば、政治の嘘は政治的場面を一つの演劇の場面にし、そして現実生活の人物を虚構の人物、政治的人間、に置き換えるのである。<sup>15)</sup>

## 二 政治における嘘の現象学

今や政治的嘘の一種の現象学を素描するのが適切であろう、とポランは言う。だが、政治においてよく起る嘘の操作を記述しつつ、ポランは、それが伴いうる必然的なこと、または行過ぎたことを測定しようとはしないだろう。

政治において、ひとはなるほど真の言説の有効性を見誤ることはできないだろう。ひとが意のままに用いる力の告知、実際の勢力の明示は、たしかに議論の最良のものである。誠実さの徹底した態度は、そのとき、場合によって生じうる敵対者たちを思いとどまらせ、そして可能なパートナーたちを集めさせる。それは目的に近づける。善意、忠実は、それだけで一つの勢力をなし、かつしばしば信頼する人々の見る前で、ひとが意のままに用いる勢力を増大させる。忠実はだから、それ自体で大いなる巧みさでありうる。グロチウスが『戦争と平和の法』の終りに発した善意（信義 *la bonne foi*）への訴えは、たとえひとが最強者でないとしても、諸政策のうちの最も効果的なものでありうる。<sup>16)</sup>

政治的嘘は、だから、例外的政策であらねばならない。それは一つの技術であるが、よく考えてからしか用いることのできない難しい技術である。嘘は、信用できる場合にしか効果的でない。精神的暴力の場合も、物理的暴力の場合と同じである。それを使用するのが適切なのは、政治行動が重大な損失なしには、または失敗の見込みなしには、それなしで済ませられない場合、そして諸々の意図や約束の領域においてのように、嘘が検査し制御するのが難しい領域においてのみである。もしひとが上手に嘘をつこうとするならば、滅多に嘘をついてはならない。<sup>17)</sup>

しかし、政治の世界における明白な事実に屈さねばならない、とポランは言う。率直に真実を言うこと、外見のもとに現実を隠さないことは、つねに有効な政策とは限らないし、それどころかよく用いられる政策ですらない。政治はたんに最強者たちの事柄ではない。それに、誰もつねに主人でありうるほど十分に強いわけではない。たとえひとが強いとしても、真実を言うだけで十分で



はなく、また、やむを得ない場合に己の力を証明せねばならなくなる。ひとが最終決戦にまで少しも行かないのであれば、政治においては強いことよりも強いと思われること、己の力を所有するよりも己の力を信じさせること、が一層重要である。そのうえ政治的状況はたいそう複雑なので、諸力の現実的關係はつねに不確かな憶測の対象である。——力の關係が、(例えば立役者の思いがけない死のような) 予見しえない事態や、結局ありそうもないことすらつねに可能な、他者の意図または行為についての仮定に依存することを考慮に入れないとしても、そして決着のつく日のみが確かめられるだろうということを考慮に入れないとしても、そうなのである。政治においては、どこで現実が終り、どこで意見(臆見)が始まるのか。——後者にとってのみ外見が重きをなすのだが。政治においてはすべては意見の事柄である。力の対決のみが、もしひとがそれを避けえなかった場合に、それまで不確かな未来においてその日が来たら、<sup>18)</sup> 真実を告げるだろう。

暴力の技術であると同じくらい意見の技術である政治は、できるだけ長い間、言説や討論を介して遂行される。それはまず第一に、説得、確信、同意のおかげで勢力を求める。この資格で、それはレトリックの技術でないわけにはいかないし、またそれはレトリックの武器——その最小のものが嘘であるわけでない——のどんなものもなしで済ませるわけにはいかない。

嘘は、ひとが意のままに用いえない勢力の外見を己に与える技術、または他の人々に、競争相手が相対的な弱さの状況にあることを信じさせる技術である。それは多少とも秘密の、現実的勢力のある何らかの關係を、ある何らかの外見(見せかけ)と置き換えようとするのであるが、その外見は嘘つきの政治家が考えるところでは、己に有利になるように現実的状況の進展をもたらすであろうものである。己の勢力または競争相手の勢力を、それが実際にそうであるのと異なったものに、それが実際にそうであるより大きなものに、またはときには、それが実際にそうであるより小さなものに見させ、そしてそれが実際にそうでないところでそれを予想させ、またそれが実際にそうであるところでそれを無視させることが肝要である。

ポランによれば、自然に、嘘は政治において一つの役割を演じる。なぜなら、政治はまず何よりも形容ぬぎに勢力の事柄である以前に、対峙する当事者たち



の勢力についての意見の事柄であるから。政治はだから、問題になっている諸々の主張や事実の、ただちには確かめられない性格に基づく、他の人々の意見に関する憶測を含蓄する。それは諸事実の領域の多少とも明かされうる秘密が問題であれ、他者の意図または自由の実際上いかんともし難い秘密が問題であれ、秘密の世界において進展する。極限的には、ひとは次のように言いうだろう。――すなわち、各人の自由は、彼の人格の周りに秘密のゾーンを発生させ、そしてその秘密、計り知れないその秘密は、熟考され計算された嘘を可能にする前に、絶えざる体験された嘘を生ぜしめる。<sup>19)</sup>

したがって、嘘はあいまいなことや確かめられないことのなかで一層楽々と動くし、そして、根拠のないことまたは恣意的なことへの訴えは、それを一層はかないものにするどころか、しばしばそれに一層の有効性を与えるのに貢献する。

それは、現にあるものまたはかつてあったものを将来あるであろうものと見なすようにさせつつ、また時間を融通のきく媒質に変えつつ、時間の不確定につけ込む。――嘘つきの計算にとって最もよいように、ある者に時間をかせがせつつ、または他のものに時間をむだにさせつつ。

こうした現実との断絶、こうした各人の意図や自由の巻添えは、勢力の明白な一手段たる精神的暴力をなす。諸情念を動揺させ、愛情や憎悪でないとしても、少なくとも信頼または恐怖を生ぜしめることが肝要である。嘘が向けられるのは、ひとが遠ざけ、思いとどまらせ、気おくれさせ、おびえさせようとする敵に対してと同様、励まし、導き、味方に変えるのがふさわしい友に対してである。それは無関心または優柔不断をさえねらいとし、そのため、怖がらせ、そそのかし、誘惑し、または危険に巻き込み、または有利な中立に帰せしめる。嘘がもはや真実に反する主張の純粹かつ単純な表現でないときから、たくさんの語が嘘をつく様式を指し示す。政治的嘘はしばしば長時間を要する駆け引きである。政治家が彼にかかわる人々に応じて異なる顔つきを示すとき、それは二枚舌 (duplicité) または二股 (double jeu) と呼ばれる。もし政治家がすべての人に話しかけるならば、彼の二枚舌は、曖昧な言説、二重の意味にとれる言説のなかに、一般的承認をうまく手に入れるための彼のお気に入りの道具を見出す。それに、どんな政治家が、自分の諸力を結集するかかる手段を、いつ

も自分に禁じるだろうか。ひとは政治家の免れがたいレトリック (l'inévitable rhétorique du politique) を偽善と称するまでになるのだろうか。一つの企画をその最良の姿で提示するために、どうしてそうしたあらゆる算段に訴えないだろうか。— その強い諸要素を高く見積りつつ、その不都合な点には深入りせず、またそれを最も確実に最も効果的な妥協として示しつつ。唯一の相違は、偽善が性格の特徴であるのに対して、政治的レトリックは準備された技術であることである。変らない嘘の駆引きはそれを一つの態度にし、そして政治家を役者に変え、彼に、それを欲しないと同時に欲しつつ、ついには演じてしまうような一つの役割、すなわち見かけの誠実さにかくれた悪意の人間の役割、を演じさせることがある。<sup>20)</sup>

政治家は現在に、つまりそれのみがそのときの彼の行動や彼の言葉を命じる現実に、生きる。彼は進行中の行動を犠牲にして、過去を考慮しうるだろうか。彼は、かつてなした発言、かつてなした約束、かつて正式に署名した契約の代価を、自分の現実的失敗で払うことができるだろうか。政治家にとって成功はすべてに勝りそしてついにはすべてを正当化するので、大政治家 (l'homme d'Etat) は、彼が自分の言葉または約束を守らないとき、また彼が自分の契約や協定に忠実でないとき、彼が得るもの、および彼が失う危険のあるもの、の計算をせねばならない。自己欺瞞の結果を割り引いて考え、かつそれを自分の即座の利益と比較することは、彼に属している。政治家の選択は決して倫理的選択でなく、つねに実際の (実用主義的) 選択である。— 彼の駆引きが彼のためにまた彼に反して引き起す道徳的諸力の勢力に賭けること、そして彼の政策の成功を保証するために彼の回りで体験された道徳の役割を計量することは、彼に属している。そのうえ、ひとはつねに悪意であることはできない。もしそれが動かしがたい善意の表明に支えられているのでなければ、効果的な悪意は存在しない。真実性と嘘との巧妙な混合のみが効果的でありうる。

政治は、公的事柄が問題であるとき、ひとが用いうる人間的諸力のできるだけ最も利口な使用であろうと努める。だから、政治家にとって彼の諸力を最もよく節約することが肝要である。策略 (La ruse) は、かかる節約の最も確実な手段の一つである。それは嘘、口実、秘密、沈黙、および確かめられる真実性の織りなしたものである。それは成功を最も低い値段で購入する。それは近道

によってそこへ導く。それは、もう妥協しようとするよりも、競争相手にとって失敗をあまり苦しくないものにすまして、おそらくやがて彼を自分の味方にしようとする。政治家に対して辣腕でずいとい誰が非難しえるだろうか。しかし策略は、秘密なしで嘘なしでどうして存在しえるだろうか。政治行動がそのとき好都合であるためには、それは秘密におおわれて嘘の庇護の下に進展せねばならず、そして嘘は、言うべきことと**言うべきでない**ことを計算する技術となる。最もしばしば、明白な嘘は避けられうる。沈黙で十分である。しかし、それが許容する言い落としは、本当は暗黙的嘘である。政治は秘密の技術であって、そこでは沈黙は、当を得た、よく計算された言葉によって示唆された、他の人々の解釈に委ねられて<sup>21)</sup>いる。

結局のところ、ポランに従えば、最もしばしば政治社会は、厳密に言って友と敵<sup>22)</sup>で作られているのではない。それはふつう潜在的な競争相手 (adversaires en puissance) で作られている。政治的關係は、相互的な不信と疑いの土台の上に立てられる。政治において、自然的な盟友も、またそれ以上に無条件的な盟友も存在しない。私的關係において起ることと反対に、政治における信頼は決して最初の状態ではない。政治的なものは疑念の土台に対して作用する。だから、自分が他の人々の各々に対してもち続けうる信頼の程度や疑念の程度を推し量ることは、各人に属している。嘘つきの政治家は、被害を受けることなしには、自分が疑いの世界に住んでいること、そして自分が原則として疑い深い競争相手に話しかけていること、を忘れることはできない。

ポランが指摘するように、意見の役割が政治生活のなかで増大するにつれて、嘘つきの政治家は集合的情報の手段、マスメディア、を自分の助力とするように導かれる。マスメディアの固有の任務は、体験されたアクチュアリテが問題であれ、文化のアクチュアリテが問題であれ、アクチュアリテ (時局性) の総体に関して公衆に情報を与えることである。それにとって本質的なことであるが、それが視聴者、一般大衆、公衆、に達する程度に応じて、マスメディアは、その編集者の資質または誠実さがどうであれ、政治的でないわけにはいかない。それが貫いて政治化されていないときにも、それは政治を免れることすらできない。それが政治的諸勢力の道具でないときさえ、それは自発的に政治権力として立てられる傾向がある。

もしマスメディアが他の人々に仕えているならば、それは意見の操縦の手段になるし、アクチュアリテの現実的景色を、その主人たちの意図に一層好都合な人工的景色に置き換える。それに、ひとは少なくともヒトラー以来、プロパガンダの有効性を知っているのであって、彼は際限なく繰返された嘘を、受入れられた自明の事柄にしたのである。徹底して思想傾向をもった情報は、一つの徹底した歪曲になる。かかる情報は、ひとが今では情報提供者たちの「情報操作」(désinformation)、攪乱(intoxication)と呼ぶところの、あらゆる試みにすら適する。もしマスメディアがそれ自身の勢力を追求して、それ自身にしか仕えていないならば、それはその種のものの法則を免れることはできない。— すなわち、過去と反省の忘却、アクチュアリテと距離をおくことのみが可能にする熟慮された判断の忘却、の中でのアクチュアリテの追求。普通のものや習慣的なもの、結局、各人の現実生活が織りなされているところの、ひとが正常なものと呼ぶものを忘れさせる、センセーショナルなもの、予期せぬもの、驚くべきもの、破局的なもの探求。最後に、平凡な市民または教養のある人間の、必要や能力や自然な好奇心への配慮と無関係に、永続的に情報を与えようと試みること。すべての人にすべてのことを、これはひとがまったく同様によく言うような、あのがらくたの山 — どんなんに対してもどんなんことでも与えること、または誰にも何も与えないこと — に等しい。<sup>23)</sup>

そこでまた、各人の目の前におかれた本当の景色に対して置き換えられるのは、様々な群衆と一時のヒーローたちの住まう、触手のようにのびた、貪欲な、たえざる変動のうちにある景色である。マスメディアによる教育は多くの幻想のおかげで、一つの永続的な非教育(déséducation)となる。それに、まったく自由に多数のマスメディアを享受する機会のある諸国には、一日中、不確かさ、曖昧さ、それに混乱を続ける、さまざま情報や矛盾した解釈の筆舌に尽くせない不協和音が住みつく。現実の世界に、紙やイメージや音の世界が代置されるが、それはあらゆるそうした魅惑的な、かくも制御しえない幻想の技術に対してシンボルとして仕える嘘の世界である。

ひとは近年ついに選挙運動を広告代理店に委託するに至るし、広告代理店は科学的に組立てられた大宣伝を使って、その洗剤や化粧石鹼を買わせるのに役立つ方法で、その候補者たちを選ばせようとする。ひとはこれ以上明白な厚か

ましい操縦、そして選挙人（有権者）たちの知性にあまり向けられていない操縦を想像することができるだろうか。ひとは、諸精神を強いることを試みつつ、諸精神の真の腐敗をもたらさないだろうか。熟慮した仕方、一人の人間または一つの状況を判断すべき政治的能力が尊重されねばならないところで、暴力、精神的暴力、への訴えが問題になっているのでないか。そこには、われわれが、われわれの現代のデモクラシーのうちに居座りつつあるのを目撃する、嘘の慣習がある。

メディアの知的階級と混合された政治的階級は、永続的なせり上げのうちに存分に楽しむ。— 各々が自分の権力と自分の責任を越えて、自分を重視し、顧客を自分に結びつけようとしつつ。情報を与えること、出来事を知らせること、を気高い任務としていたマスメディア — その理由は、世論に知らせるその使命が全面的に遂行されるから、または、その使命がまったく遂行されないからだろうか — かかるマスメディアはただ単に世論に取って代わる傾向があり、そしてもう少しで、それは出来事に取って代わるところだったし、またそれは出来事になるのである。もはや自分を嘘とすら思わない嘘、発明者たちも観客も気づくのをやめてしまった幻想、それより見事な嘘をひとは夢想することができる<sup>24)</sup>だろうか。

古典的な政治的嘘は、知的な競争相手に向けられていた。集合的な政治的嘘はむしろ、各人において潜在的な、勢力、自由、安全、平等の諸欲望を主成分とする一種の集合的な政治的無意識に向けられており、そして、各人は公権力によって自分の利益にかなうようにさせようとする。あらゆる手段によって諸々の確信を作り出そうとし、大きな恐怖や魅力的な期待を引き起そうとするプロパガンダの操縦は、諸現実とのたんに象徴的な諸関係を当て込む。自発的な嘘は、イデオロギーの発達において意図しない嘘と合流する。

政治的人間がうまく制御しないこの次元で、一種の変質が政治的嘘について起り、それを政治的幻想に変える。後者は前者より先在するが、その理由は、後者は自然状態または黄金時代の、終末論的な大きな神話によって養われているからである。そのとき、あらゆる政治的勢力が諸個人の弱さに置き換えられえ、そして、かれらの欲望のいかなるものの満足をも、世俗的パラダイスをも保証しえるが、そこでは、個人のために、しかし個人を欠いて、すべてがなさ

れるだろう。各人はそのとき、その負担を背負うことなしに絶対的自由を享受するだろう。ひとはここに自由と平等 — あの反目する姉妹 — を結びつけようと望む民主主義者たちや、権威を欠いた社会における絶対的自由、政治を欠いた政治、を望むアナキストたち、または、文明状態の享受をやめることなしに、文明状態のなかで自然状態を享受しようと望む、あの最近のエコロジストたち、を再び見出すだろう。政治を欠いた政治のあらゆる矛盾、あらゆる不可能性は、自分自身と他者に対する、一つの幻想となったあの嘘によって解決されるだろう。とはいえ、政治は諸々の幻想を、またあの神話的諸幻想をさえ、なしで済ませることができようか。<sup>25)</sup>

しかし、ポランによれば、すでにマキアヴェリが政治における嘘の問題を論じていた。だから、マキアヴェリと『君主論』のあの有名な第18章に戻ることでは十分ではないだろうか。マキアヴェリは次のことを思い出させている。 — 「偉大なものとなった君主たちは、自らの誓約を気になかなかし、策略によって人々の心を丸め込むことができた (*aggirare e' cervelli delli uomini*)。同時にかれらは、誠実さに基づいた人々を越えていた。<sup>26)</sup>」マキアヴェリが戦いの二つの様式 (*duo generazioni di combattere*) を区別していることが思い出される。一つは人間にふさわしいもので、法律の使用、合法性と忠実さの尊重、法律によってしばられた誓約の尊重からなる。人間はもう一つのものを動物と分ちもっているが、それはライオンの勢力が問題であれキツネの策略が問題であれ、力の使用からなる。動物の方法を実践するためには、力が二重に効果的であるように、暴力と策略を併せもつことが必要である。<sup>27)</sup> 政治的賢者 (*Le sage politique*) は偽装し本心を隠すことができ、外見にかくれて行動し、そして、彼がそこに永続的不利を見出すや否や、自らの誓約を守らないことができなければならない。必要不可欠な策略は、だから、ただたんに嘘をつく技術である。<sup>28)</sup>

### 三 政治における嘘と道徳

政治の技術は、道徳の秩序と共通点をもたない。だから、ポランがそれを論証しようと試みたように、もし嘘が、政治行動にとって本質的であると同時に、政治において成功の必要不可欠な (*sine qua non*) 手段として実際に実践され



るとすれば、ひとはそこから、嘘は政治において道徳的問題を提起しない、と結論しうる。それは恥ずべきことでも称賛すべきことでもないのである。<sup>29)</sup>しかし、政治の秩序が道徳の秩序と共通点をもたないとしても、この二つの秩序は、それらが互いに対立するかまたは互いに助け合う、議論の余地のない遭遇の場をもっている。

その第一のものはこうである。ひとが身を捧げる諸価値がどのようなものであれ、統治者としてであっても、または最も貧しい被治者としてであっても、何人も政治に立ち入らないわけにはいかない。したがって、彼がどれほど忠実で、どれほど真実で、どれほど誠実であろうとも、何人も政治の本質的な嘘を、政治生活に内在する嘘を、免れることはできない。政治によって提起される道徳的問題 — 真のゴルディオスの結び目 (noeud gordien) — は、提起される前に、不可避的に政治的な人間存在の事実自体によって解決され切断される。<sup>30)</sup>

第二に、次のような事実がくる。政治は結局、一つ的手段でしかなく、しかもそれは逸脱なしには、無際限な悪循環の中で己自身に閉じこもり己自身を目的と見なすことができず、また、それが用いる勢力のどんな道具も一層そうであるような手段でしかない。政治の諸目的の選択は、政治のテクニク、公権力のテクニク、およびその本質にとって外在的である。それは、そうしたもののにとってまさしく超越的である。政治的なものの究極目的 (finalité) は、暗に形而上学的な一つの決定である。— それは個人としての、また集団としての、人間のある何らかの考え方に、その価値へのある何らかの信仰に、人間性の意味のある何らかの規定に、依存するのである。それは語の最も高尚な、そして最も一般的な意味で道徳的である。それゆえに、政治は、その勢力の手段やそのテクニクとともに、また、本質的なまたは偶然的なそのあらゆる嘘とともに、一つの道徳的確信に、それらがその必要な手段である道徳的意義をもつ一つの行動に、従属する。— ティラニーまたは全体主義の場合のように、政治的なものが己自身を目的と見なす、あの種の逸脱が生じるのでない限り。政治における嘘は、ひとが道徳的と称する諸価値に、人間性のある何らかの実現に、<sup>31)</sup>仕えている。

こうして、人間存在がそうであるあの不完全な混成体において、嘘の使用の道徳的問題は、結局、手段と目的の古典的問題に帰着する。ひとは、マキアヴェ

りとともに、政治においてすべては成功で測られる、と言いうる。しかしなおも、成功はそれだけの値打ちがあり、仕事は割に合うのでなければならない。言い換えれば、政治においてもまた、たとえ成功が優位に立つとしても、目的の選択は、手段の選択と切り離せない。たとえ暴力、物理的および精神的暴力、のテクニックが政治において避けられないとしても、政治的人間は、探求される目的と利用される手段の関係が構成する諸価値の全体的体系を評価する力と資格をもったままである。彼がどうあってもその手段を引受けるのを望まない目的を拒否することは、彼に属している。ひとは不条理なしには、目的を欠いた手段または手段を欠いた目的を考えることはできない。一つの目的を想起することは、それに達するために合理的に必要な手段を含意している。政治家の責任は全体的（包括的）な責任である。— それは少なくとも自分の目に、次いで他の人々の目に、そして歴史の目に、目的の価値と手段の価値の総和が、結局、プラスの価値であるようにすることである。<sup>32)</sup>

古い格言「目的を欲する者は手段を欲する」は、政治において価値があるが、しかしそれは、その真の意味で理解されなければならない。— 手段は、目的と同時に選択され、計算されること。また、考慮される価値は、全体の価値、一つの全体として考えられた政治手続の価値であること。政治における嘘の使用に関する道徳的問題が存在する、また存在しない、というのは、そうした意味においてである。またそれゆえに、政治家は、彼がその大勝利を望む道徳的価値の名において、次のように言うことができる。— 「公の事を担うとき、嘘をつくことはまったく恥すべきことでない」 (*In publicis rebus gerundis, haud turpe est mentiri*)<sup>33)</sup>。

#### 注

- 1) Raymond Polin, «Non turpe est mentiri in publicis rebus gerundis», *Language et Politique* (ed. Maurice Cranston - Peter Mair, European University Institute, 1982), p. 107.
- 2) Polin, art. cit., pp. 107 - 108.
- 3) Polin, art. cit., p. 108.
- 4) Machiavelli, *Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio*, I, 3. 「共和国について書きしるしているすべての人の指摘にもあるとおり、また、どの歴史のなかにもあふれているその実例に照らしてみても、国家をうちたて、それに法律を整備させようとする人

- は、次のことを肝に銘じておく必要がある。／すなわち、すべての人間はよこしまなものであり、自由かってにふるまうことのできる条件がととのうと、すぐさま本来の邪悪な性格をぞんぶんに発揮してやろうとすきをうかがうようになるものだというのである。彼らの邪悪さがしばらくのあいだ影をひそめているとすれば、それはなにかまだわかっていない理由によるのであって、そのうちにあらゆる真理の父であるといわれている時間が、その化けの皮をひきはがすことになる。」(『政略論』永井三明訳、世界の名著「マキアヴェリ」、中央公論社、179-180頁。)
- 5) Polin, art. cit., pp. 108-109.
- 6) Polin, art. cit., p. 110.
- 7) このような外部の法廷と内心の法廷の関係、また主権者の権力と市民たちの自由の関係について、ホッブズを参照。Hobbes, *Leviathan* (ed. Pogson Smith, Oxford University Press, 1909), Part I, ch. 15, & Part II, ch. 21. 「自然法は、内面の法廷において in foro interno 義務 (オブライジ) づける。いいかえれば、それらは、それらがおこなわれるべきだという意欲をもつように拘束する。しかし、かならずしもつねに、外部の法廷において in foro externo すなわち、それらを行為するように、拘束するのではない。」(『リヴァイアサン』一、水田洋訳、岩波文庫、247頁。)「したがって、第一に、設立による主権は各人の各人にたいする信約によるものであること、獲得による主権は、敗北者の勝利者にたいする、または子の親にたいする、信約によるものであることをしるならば、あきらかに各臣民は、それにたいする権利が信約によって譲渡されえないような、あらゆるものごとにおいて、自由をもつのである。」(同書、二、109頁。)
- 8) Polin, art. cit., p. 110.
- 9) Polin, art. cit., pp. 110-111.
- 10) Polin, *ibid.* cf. Pascal, *Pensées* (éd. Brunschvicg, Garnier Frères, 1961), 299, 301, & 311. 『パンセ』前田陽一・由木康訳、世界の名著「パスカル」、中央公論社、189-193頁。
- 11) Polin, art. cit., p. 111.
- 12) Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, II partie, *Oeuvres complètes*, Pléiade, t. III, p. 177. 『人間不平等起原論』本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、105頁。また、白石正樹『ルソーの政治哲学』上巻、早稲田大学出版部、1983年、89-93頁参照。
- 13) ルソーの社会契約は、自ら立てた「基本的問題」に答える形で、個々人 (particuliers) と公共 (public) との契約として構想されている (*Du contrat social*, liv. I, ch. VI)。次の章で、ルソーは社会契約の「自律性」と「相互性」についてこう述べている。「この公式から次のことがわかる。すなわち、結合行為は公共と個々人との間の相互の約束を含むこと、また、各個人は、いわば自分自身と契約しているので、二重の関係で——つまり、個々人にたいしては主権者の構成員として、主権者にたいしては国家の構成員として——約束していること、とである。しかし、何びとも自分自身と結んだ約束には責任がない、という民法の規則は、ここでは適用できない。……」(*Du contrat social*, liv. I, ch. VII. 『社会契約論』桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、32-33頁。)
- 14) 社会契約のいわゆる全面的譲渡 (aliénation totale) について、ルソーはのちに次のよ

- うに説明している。——「社会契約において個々人の側に真の放棄があったというのは、まったく誤りであり、かれらの状況は、この契約の結果、以前そうであった以上に現実に望ましいものになること、そして一つの譲渡の代りに、かれらには有利な交換をしたにすぎないことがわかる。……」 (*Du contrat social*, liv. II, ch. IV, *Oeuvres complètes*, Pléiade, t. III, p. 375.)
- 15) Polin, art. cit., p. 112.
- 16) Grotius, *De Jure belli ac pacis* (tr. by Francis W. Kelsey, 1925), Bk. III, ch. XXV. グローチウス『戦争と平和の法』一又正雄訳、第三巻、「第二十五章 結論。信義と講和の勧奨」参照。
- 17) Polin, art. cit., pp. 112-113.
- 18) Polin, art. cit., p. 113.
- 19) Polin, art. cit., pp. 113-114.
- 20) Polin, art. cit., pp. 114-115.
- 21) Polin, art. cit., pp. 115-116.
- 22) cf. Carl Schmitt, *De Begriff des Politischen*, 1932. 『政治的なものの概念』田中浩・原田武雄訳、未来社、1970年。
- 23) Polin, art. cit., pp. 116-117.
- 24) Polin, art. cit., pp. 117-118.
- 25) Polin, art. cit., p. 118.
- 26) Machiavelli, *Il Principe*, 18. 「君主が信義を守り狡猾(こうかつ)に立ちまわらずに言行一致を宗(むね)とするならば、いかに贊(たた)えられるべきか、それぐらいのことは誰にでもわかる。だがしかし、経験によって私たちの世に見てきたのは、偉業を成し遂げた君主が、信義などほとんど考えにも入れないで、人間たちの頭脳を狡猾に欺くすべてを知る者たちであったことである。そして結局、彼らが誠意を示した者たちに立ち優ったのであった。」(『君主論』河島英昭訳、岩波文庫、131頁。)
- 27) Machiavelli, *Il Principe*, 18. 「あなた方は、したがって、闘うには二種類があることを、知らねばならない。一つは法に抛り、いま一つは力に抛るものである。第一は人間に固有のものであり、第二は野獣のものである。だが、第一のものでは非常にしばしば足りないがために、第二のものにも訴えねばならない。…… /したがって、君主には獣を上手に使いこなす必要がある以上、なかでも、狐と獅子を範とすべきである。なぜならば、獅子は罾(わな)から身を守れず、狐は狼から身を守れないがゆえに。したがって、狐となって罾を悟る必要があり、獅子となって狼を驚かす必要がある。単に獅子の立場にのみ身を置く者は、この事情を弁(わきま)えないのである。」(同書、131-132頁。)
- 28) Polin, art. cit., p. 118-119.
- 29) Polin, art. cit., p. 119.
- 30) Polin, *ibid.*
- 31) Polin, art. cit., pp. 119-120.
- 32) Polin, art. cit., p. 120.
- 33) Polin, art. cit., pp. 120-121.